

錦
帶
橋
史

館内閲覧用



錦帶橋史



岳樹如楠學人
永田新之允著

錦帶橋史刊行の趣旨

岩國市編纂の錦帶橋史は、永年錦帶橋に関心を懷く永田氏に依りて起稿せられ、弘く古今の文書を資料となし、去昭和二十五年九月十四日の颱風禍に因りて墜落流失したるを機端に爾來二年八ヶ月を費やし稿本紙數一千枚の力作と成り、今や活刷に附して堂々七百ページの大冊として世に出づるに至つた。

抑も錦帶橋は吾が岩國の名勝として夙に國內に喧傳し、岩國の錦帶橋か、錦帶橋の岩國か、一大奇橋として定説あるは普ねく世の知る所、而して近世世界各國と交通の開くるに隨い、此の橋が獨り日本の名橋たるのみならず、世界に稀れなる橋梁たることが明白となり、錦帶橋の盛名は遠く広く海外に傳わり、其國々の刊行物にも掲載せられ、單なる奇橋として語らるゝに止らず、近代工学の上から見ても、極めて合理的構造

の建築物であることが驚歎せらるゝを聞くに於て、われわれ郷土人は今より二百八十年の昔に於て、既に此の工業技術の粹を成遂げたる民族的誇りを以て、幾久しく此の名橋を保全し且つ之を天下に宣傳し觀賞せしめねばならぬ。

思ふに吾が岩國觀光協會の由つて起りし所以も、亦主として是れに在るのであるから、此の書の稿本成るに当り之れが發行を担当して廣く世に販布することは、本会の使命であると信じ敢て刊行の趣旨を述べて、大方各位の一讀三讀を乞ひ、わが錦帶橋の長齡二百八十年に亙るいろいろの物語りの奇しき事や、工学的由來の偶然でない事を觀賞せられんことを冀うてやみませぬ、果して然らば吾が岩國觀光協會が、本書を發行したる趣旨も達せられて極めて満足に存ずる所であります。

昭和二十八年十二月

岩國觀光協會會長 戸崎芳男



錦帶橋、錦川、水戸、名橋、
設、近、實、自、官、制、合、
三、代、萬、言、以、廣、其、代、
現、代、工、業、力、學、規、
不、幸、昭、和、五、年、不、幸、
一、致、熱、意、自、建、見、
謂、
本、言、著、者、永、田、岳、岡、
在、此、世、下、志、
或、市、中、
郎、里、民、生、調、整、
今、
十、三、
翁、
老、
望、

王竹山用筆

吉川廣家毛利元就孫ニシテ毛利家一族中於ケル
麒麟兒ナリ。彼ノ關係役際ニ苦心經營ニ宗滿擁
護ニ盡瘁シ然レ其功伐ハ安藝ノ禰崎ハ後淺野氏防
長ノ毛利氏ノ間ニ介在シ岩國ニ栖遲シ其ノ晩節ヲ全セリ。
經世前ノ危局ニ方リシ其ノ子孫亦能祖先ノ志ヲ紹キ宗

王竹山用筆

滿ノ為努力周旋ス吉川ハ毛利氏祖見其ノ始終ニモト
謂フヘシ。岩國ニ江戸幕府時代毛利家附庸トシテ存在シタ
事實ヲ立證ス其ハ毛防ノ州中燭日一已ノ頭角ヲ露シ
明治後於其ノ人物消々トシ朝野ニ近シ。
此モ岩國ノ名聲ヲ天下訖シト云。寧ニ錦帶橋ノ為ナリ

里卷際し更斯著作アリ而し予一言微子尚
立世界國民史ヲ撰ニ關係、從違心密ニ言慮求、苦
衷ヲ諒スルモリ、加フニ國史、身ノ幾代諸名士、相識妙
ヲ持、至國史ハ、仕年、國史、編ネテ、著現、猶、亦、來、筆
十年、紙、文、滿、ハ、コ、ロ、イ、シ、君、ヤ、今、ハ、シ、コ、ロ、イ、シ、モ、九、年、一、個、ニ

王竹山用筆

與、衰、朽、幾、キ、一、片、紙、今、當、錦、唐、書、ハ、シ、ナ、ン、式、ハ、コ、ロ、イ、シ、
欣、然、ソ、ノ、需、ニ、在、ル、モ、シ、シ、ニ、當、ニ、偶、然、ナ、ン、式、ハ、コ、ロ、イ、シ、

若夫、本書、錦、唐、書、共、出、國、外、文、ハ、シ、レ、テ、真、後、昆、
竹、ハ、足、ニ、須、ウ、本、書、就、之、ヲ、見、ニ、中、ハ、師、師、ヲ、シ、ン、

昭和廿年五月廿一日

大國史學、新、寧、堂、藏、本、

(蘇峰先生親筆序文の活字訳)

吉川廣家ハ毛利元就ノ孫ニシテ毛利家一族ノ中ニ於ケル麒麟兒ナリ。彼ハ関原ノ役ニ際シ苦心經營一ニ宗藩擁護ニ盡瘁シ然モ其功ニ伐ラス安藝ノ福嶋氏——後ニ淺野氏防長ノ毛利氏ノ間ニ介在シ岩国ニ栖遲シ其ノ晩節ヲ全フセリ。

維新前后ノ危局ニ方リテハ其ノ子孫亦能ク祖先ノ志ヲ紹キ宗藩ノ爲ニ努力周旋ス吉川氏ノ毛利氏ニ於ケル其ノ始終アルモノト謂フヘシ。岩國ハ江戸幕府時代毛利家ノ附庸トシテ存在シタルモ事實ハ獨立ノ格式ヲ具ヘ長防二州中獨自一己ノ頭角ヲ露ハシ明治以後ニ於テハ其ノ人物ハ濟々トシテ朝塾ニ遍シ。

然モ岩國ノ名聲ヲ天下ニ謳ハレタルハ寧ロ錦帶橋ノ爲メナリ錦帶橋ハ錦川ニ架シタル本邦無二ノ名橋ニシテソノ架設ハ延宝年間ニ溯リ今ヲ距ルコト二百八十年吉川家第三代ノ藩主吉川廣嘉ノ代ニ作りタルモノ其ノ技術獨創的ニシテ現代ノ工業力学ノ規準ニ自然適合ス。

不幸昭和廿五季不可抗力ノ爲メニ流失シタルモ岩國市民諸君協同一致ノ熱意ニヨリ遂ニ再建ヲ見ルニ至リタルハ固ニ近來ノ大快事ト謂ハサルヲ得ス。

本書ノ著者永田岳淵翁ハ亦岩國ノ產出シタル一人物ニシテ少壯ニシテ慨然天下ニ志アリ或ハ操觚者トナリ或ハ代議士トナリ又或ハ市長トナリテ郷里ノ民生ヲ調整シ今ヤ八十三翁トシテ老ヲ郷里ニ養フニ際シ更ニ斯ノ著作アリ而シテ予ニ一言ヲ徵ス予曾テ近世日本國民史ヲ撰ミ関原ノ役ニ追テ心竊ニ吉川廣家ノ苦衷ヲ諒トスルモノアリ加フニ岩國出身ノ現代諸名士ト相識ルモノ尠カラス特ニ岳淵翁トハ壯年時代案ヲ聯ネテ筆硯ヲ偕ニシ爾來幾十年親交渝ルトコロナシ君ヤ今ハ八十三予モ亦九十一俱ニ與ニ衰朽ニ幾キニ一片耿耿ノ念豈ニ銷磨シ去ルモノナラン哉乃チ予カ欣然ソノ需ニ應スルモノソレ豈ニ偶然ナラン哉。

若夫レ本書ノ錦帶橋ト共ニ岩國外史トシテ眞ヲ後昆ニ傳ルニ足ルモノ須ラク本書ニ就テ之ヲ見ハ必ス餘師アラン。

昭和廿八年五月卅一日

火國后学 蘇峰 菅 原 正 敬

錦帶橋史に序す

錦帶橋史稿漸く成らんとするや著者永田氏より屢々書を寄せて一篇の序文を題せんことを以てせらる、予等固より其の任にあらざるを以て再三之を辞す、頃者永田氏又書を寄せて曰く、他に理由あらば格別なれども、今度の錦帶橋再建工事に対する技術上の主役は予等兩人なり、二人の姿は錦帶橋再建史上に屹として聳えて居るに係らず、卷頭其の言葉を缺ぐは龍の鱗角を失い、鳳の羽翼を脱するが如し、只だ著書自体が龍鳳の態を備えざるを耻づのみと、言甚だ慇懃である、予等答うる辞に窮し茲に不文を顧みず小序を贈りて其請いに隨う。

方今工学専門先達の士多きに係らず予等兩人が、此橋再建の設計並監督の囑託を受るに至れるは、其事必ずしも偶然にあらず、兩人の内佐藤は少年の頃、父の官職に従い岩国に居住して岩國中学校（今の高等学校）

に通学し朝夕橋上を往復すること数年、橋との縁故淺からざるのみならず、同窓の旧友亦岩国に少なしとせず。青木は岩国出身者たる長老の家と姻戚關係を結び、其家を通して岩国を識ること多年に及んでいた、先づ此んな縁故によりてたまたま去昭和二十五年九月の錦帶橋流失變事あるや、兩友共に起つて市の囑に應じて微力献替の身となつたわけである。

初め再建の議の東京に於て行わるるや寧ろ此機会に舊型を一變して平坦な鉄筋コンクリート橋にすべしという説も先輩の間に有力に唱えられた。此くなれば実用道路一邊倒の橋となつて文化財たる錦帶橋は、二百八十年の歴史と共に消滅してしまふのであつた。しかし実用主義の有力であつたと同時に文化財として旧型を永存すべしとの説も有力であり、遂に後者の説が多数を得て壹億貳千万円の經費を投じ、旧型其まゝの錦帶橋が再び山紫水明の城山の下、錦川の上に顧望するを得るに至りしは獨り岩国郷土人の欣びのみではあるまい。

創建当時の原型に據りて再建するという立則は固く守りて變るところなきにせよ。但し橋の壽命を長く保たしむる技術上の方法は、之を二百八十年前、文物未だ混沌を免れざる時代に比すると、今や雲泥の差ある工学の發達せるものがあるから、其れに準據するは我々工学者の務めであり且又時代も其れを要求している。依りてピア（橋台）の基礎施工が在來編木式であつたものを井筒式鉄筋コンクリートとし、橋梁の桁受を在來は隔て石を以てしたるを沓鉄に改めて隔石を全廢したる事。洪水位の高度の變化に伴い橋脚、橋梁の高さを増加する必要があるを認めて在來より五十糎乃至一米高くした事。用材全部に防蟲防腐劑 P・C・P を注入し橋の保存を長くし架替期を延伸するに務めたる事等が、此度の再建に用いた我等兩人の注目点であり、技術上、學問上の努力点であつたことを自ら信ずるものである。

我等兩人が技術者として此橋の再建に用いた所信は、別に本書の末尾に添えられた附録第壹号『錦帶橋の再建』に縷述しておいた。大方の各位

に於かれては、本書を讀まるゝに隨ひ此附録第壹号にも目を注がれて、
今度の錦帶橋が技術的には如何に成遂げられたのであるか、了解を賜わ
らんことを望んで己まない、果して然らば、天下後世、錦帶橋を經營力
作する者、江を隔てて舟なきを歎ずるような聲を聴かずして止むであろ
うと考える。

昭和二十八年六月

工学博士 青 木 楠 男

工学博士 佐 藤 武 夫

自　　序　　（再び）

此書元と岩国市長津田彌吉氏の嘱に依り岩国市史の一部として編纂せるもの、時正にキジア颱風暴威を振り錦帯橋流失直後、新に計を設けて再建に着手せる当時である、昭和二十五年十一月稿を起し同二十六年三月第一章より第十章に至る記事を終り、同年二月二十二日起工式以後完工に及ぶ迄の記事は、徐ろに其の経過を見て叙することとし本年五月三日の完工式に至りて乃ち筆を止む。此の間、昭和二十六年四月津田市長は経営慘憺たる建橋遺策を譲りて満期退職し、久能寅夫氏代つて市長に就き、前業を継紹して幾多な難関を突破し、空前にして且つ絶後ならんことを冀う此の大事業を竣功せしめたことは、津田前市長の其れと共に、何んとしても岩国史の上にも亦錦帯橋あつて以来の橋史の上にも一大記録を遺したものと謂わねばならぬ。

筆者は元来少年の頃より、錦帯橋に興味を懷き、敢て其の堂奥を究めたりとは言わざるも、其の門戸を窺うに於て必ずしも人後に落ちざる用意を有し、後年岩国に於て此の名橋を世上に紹介する文章印字は、概ね筆者の墨滴に成るものであつた、而して明治四十二、三年の頃、財団法人岩国保勝会の創立を提唱したるも、元是れ錦帯橋保存を主眼としたるに外ならぬ、筆者と錦帯橋との交渉は他の郷人に比して、因縁浅からぬものがあるを自ら思うと共に、此度『錦帯橋史』を編纂する使命を荷うに至れるは、強ち偶然でないことを自覺する。

併し乍ら筆者は、史癖を有する一個の窮措大に過ぎない、固より橋の構造や建設に対する技術上の智識は殆んど皆無と言つても其れが謙遜の浮言葉ではない、然も此の史に必要な事は、建築技術上の見解を後世の斯道家に示すに十二分の文献とならねばならぬことである、之に關しては出来る丈け専門家の橋に因む刊本を涉獵し橋の智識を仕入れ、而して昭

和二十五年災害後の再建に当り、岩国市の囑託を受けて工事の設計、実施監督の重任を荷い、終始尽力せられたる早稻田大学教授の工学博士佐藤武夫、同工学博士青木楠男の両氏に、工学的立場から卷末の附録一号の記述を請い特集して、以後世の鑑としたのもこういう次第である。錦帯橋の寿命の幾久しく長からんことを望むは勿論であるが、天下後世、改築又は不幸再建の事あらば之に抛りて善処あらんことを願うて已まない、此の史を編纂する趣旨亦多く懸つて是に在る。

本史の口絵又は挿し絵の中には、今度の再建に従事し労苦万功を成された人士の姓名肖像を特載して置いた、此の人々は過去二年有半の間、凍日熱天、利害損得を超越して日本否な世界独絶の文化財たる名橋確保の為に、精神的献身の勞を捧げられたるを思わざるを得ないからである、筆者は此の稿を草するに当り吉川元子爵家の古文書を検討するに際して、其の当時、創建再建に奉公した藩臣の姓名を読むにつけ、其の位牌に対し合掌默禱を捧げたいと思う程、感奮に打たれたからである。後世の郷土人士、能く其の姓名を記憶し其の面影に接し其の勞苦を偲んであげて下さい。

特に記すべきは、本書の卷頭に於て、我国のみならず世界を通じて著名なる、吾が論壇史林の耆宿文豪九十一翁蘇峰徳富猪一郎先生が、他の為に輒しく容されざる自筆の序文を筆者に賜わつた事である、筆者は青年の頃先生の論壇たる国民新聞民友社に在りて先生の机下に学び、文徳の指導を受くること尠なからぬ因縁を有する者である、今や社中同人殆んど世を去り、独り先生寿にして老氣百王の師、老鶴万里の志を抱いて筆硯ますます豪雄、筆者亦天福を剩し日夜兀々として管毫を耗す、八十三叟今や先生の序詞を獲て卷頭を飾るは幸何ぞ之に過ぎん、錦帯橋史に万丈の虹霓を吐くものである。

昭和二十八年五月二十五日庵前の丘山翠嵐蒼々を眺めつつ岩国市牛野谷の帰燕庵に於て

私は多年錦帶橋の袂に棲居し、朝な夕な橋畔を散歩し、又は一日数回橋上を往復して橋を礼讃したものである、而して創建者吉川広嘉公の偉大なる積極精神、奇抜なる創造意力に敬服した旧藩臣の子孫である、而も其れが日本民族の優秀なる発明力を代表する第一人者として崇拜せねばならぬ英雄たるを思わざるを得ない、斯公去つて蒼茫二百七十年、人は逝き時は移り、桑滄の感慨無量なるも錦帶橋は依然として風霜を凌ぎ其の偉大なる傑作を伝えて来た、時に隆替変故あるを免れずと雖も、岩国市民は幾百千年の末の末まで此の傑作を伝承せねばならぬ、私は清風樓に満つるの日、寒灯室を照すの夜、彷彿たる広嘉公の面前に於て、公と語りつつ此の稿を進めた、公を助けて創建工事に忠誠を致した児玉九郎右衛門や湯淺七右衛門とも、臂を執つて相語つた、其れが即ち此の「錦帶橋史」の一編である。

昭和二十六年三月

八十一雙

岳 淵 生